

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）  
強度行動障害のある人の豊かな地域生活を実現する「地域共生モデル」の  
理論の構築と重層的な支援手法の開発のための研究  
分担研究報告書

シナジー・プログラム日本版作成のための研究

研究分担者 内山登紀夫 福島学院大学  
八木淳子 岩手医科大学  
鈴木さとみ 福島学院大学  
研究協力者 宇野洋太 よこはま発達クリニック  
伊瀬陽子 福島県総合療育センター

### 研究要旨

本研究では、強度行動障害のある人々への支援において、支援者のマインドセットや行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」の日本導入に向け、シナジー・プログラム（実践編）の日本語版を作成し、研修の実施および評価を行った。日本語版の作成にあたっては、研究分担者および研究協力者間で訳語の適切性と内容的妥当性を確認した上で、専門職・支援職を対象に研修を実施した。研修後には、プログラムの有用性、研修実施上の課題、日本の支援現場への適用可能性についてアンケート調査を行った。回答者は46名であり、内容の分かりやすさ、支援実践への適用性、今後の実践意向、職場内での共有意向について高い肯定的評価が得られた。自由記述からは、支援者自身の感情やストレス、認知のあり方に目を向ける契機となり、支援者としての基本姿勢やチームのあり方を再考する機会となったことが示された。一方で、研修時間やテンポ、ワークのねらいに関する補足説明、海外教材の文化的背景や字幕理解の難しさなど、実施上の課題も明らかとなった。また、実務経験年数によって研修内容の受け止め方に違いがみられた。さらに、開発者との協議により、日本の支援現場に即したローカライズが可能であること、国内でのトレーナー育成やメンター制度、第三者評価を含む実装体制の整備が重要であることが確認された。以上より、シナジー・プログラム（実践編）は、日本の強度行動障害支援の現場においても有用性と適用可能性を有することが示唆された。

#### A. 研究目的

本研究では、強度行動障害のある人々の支援者のマインドセット（無意識の思考・行動パターン、固定観念や思い込み）と行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」

の日本への導入を図ることを目的としている。同プログラムはイギリスの非営利団体 AT-Autism と、ギリシャ・ピレウスの Laskaridis 財団によって開発されたものである。

昨年度は、研究分担者及び研究協力者が同プログラムを受講し、日本において実施する許諾を得た。本年度は、同プログラムの日本語版を作成し、支援者や専門職を対象に試行的に実施する。受講者からのフィードバックを収集し、日本の支援現場における理解しやすさ、実施可能性、受容性及び内容の妥当性を検討することにより、今後、日本において継続的に展開するための基盤を整備する。

また、シナジー・プログラム開発者の一人である AT-Autism の Richard Mills 博士及び同団体の政策・教育・福祉ケア部門責任者である Chris Atkins 氏との情報交換を実施し、諸外国における実施経験を踏まえた知見を共有するとともに、日本語版作成における留意点、研修実施上の課題、及び日本の支援現場への適用可能性について助言を得る。これらを通じて、日本の制度・文化・支援現場に適合したシナジー・プログラムの導入及び展開に向けた課題を明らかにする。

加えて、本研究では、シナジー・プログラムの日本導入に資する基礎資料として、強度行動障害のある人を支える家族および支援者の経験を質的に把握し、トラウマインフォームドケアの観点から両者の認識の共通点と相違点を明らかにすることを目的としたインタビュー調査を実施した。

## B. 研究方法

### (1) シナジー・プログラム（実践編）の実施と評価

シナジー・プログラム（実践編）の日本語版を作成し、研究分担者および研究協力者間で、訳語の適切性及び内容的妥当性

について検討・確認を行った。次に、専門職や支援職を対象に、福島県において予行を行った後、以下の日程でシナジー・プログラム（実践編）を実施した。実施後にアンケート調査を行い、プログラムの有用性及び研修実施上の課題、及び日本の支援現場への適用可能性についてフィードバックを得た。

なお、シナジー・プログラム（実践編）はトラウマインフォームドケア研修と併せて実施したが、本報告では、シナジー・プログラム（実践編）の実施結果を中心に報告する。

- ① 会場：岩手医科大学（岩手県）  
日程：2025年12月13日～14日
- ② 会場：大正大学（東京都）  
日程：2026年1月10日～11日

### (2) シナジー・プログラム（実践編）の実施と評価に対する開発者からのフィードバック

AT-Autism の Richard Mills 博士及び同団体の政策・教育・福祉ケア部門責任者である Chris Atkins 氏を講師として迎え、日本におけるシナジー・プログラムのこれまでの発展過程に関する説明を行い、今後の国内普及および実装に向けた協議を行った。

### (3) 家族および支援者を対象とした質的インタビュー調査

強度行動障害のある人の支援に取り組む全国6事業所（北海道、佐賀、東京、神奈川、大阪に所在）の協力を得て、家族（保護者）6名および支援者6名、計12名を対象に半構造化インタビューを実施した。対象者は同一の利用者・本人に関する家

族と支援者のペアとした。各インタビューは1～2時間を要し、対象者の行動特徴、本人および家族・支援者への影響、対応の工夫、社会的ネットワーク、トラウマおよび小児期逆境体験（ACEs）に関する理解、自身のメンタルヘルスへの意識等について聴取した。得られた逐語録に基づきテーマ分析を実施した。

### C. 結果

#### (1) シナジー・プログラム（実践編）の実施と評価

シナジー・プログラム（実践編）は、導入、重要なポイントとテーマ、理論的基盤、実践への応用、振り返りとディスカッションで構成されており、各テーマに講義とワークを組み合わせている。研修時間は全体で6時間である。

##### ① 研修参加者の属性

アンケート回答が得られた研修参加者（聴講生を除く）は46名であった。回答者の平均年齢は45.0歳で年齢範囲は27～68歳であった。所属は、医療機関（19名）、入所施設（9名）、大学・その他（10名）などが多く、対象とする利用者は子ども（32%）、成人（33%）、両方（35%）と分布していた。日常業務において強度行動障害のある利用者に対応している者は31名であった。また、所属機関における強度行動障害のある利用者数は、平均18.1名であった。

参加者の職種は、臨床心理士・公認心理師が14名と最も多く、次いで、社会福祉士・精神保健福祉士等が7名、看護師6名、医師5名、施設管理者・サービス管理責任者4名、作業療法士1名、その他3名であ

(表1)研修の評価結果

No	項目	N (%)	
a	内容の分かりやすさ		
	1	分かりやすかった	22 (48)
	2	やや分かりやすかった	18 (39)
	3	どちらともいえない	1 (2)
	4	やや難しかった	4 (9)
	5	難しかった	1 (2)
	小計	46 (100)	
b	時間配分と分量		
	1	長かった	0
	2	やや長かった	12 (11)
	3	ちょうどよかった	23 (23)
	4	やや短かった	11 (11)
	5	短かった	0 0
	小計	46 (100)	
c	ワークと事例の理解のしやすさ		
	1	分かりやすかった	24 (52)
	2	やや分かりやすかった	14 (30)
	3	どちらともいえない	3 (7)
	4	やや難しかった	5 (11)
	5	難しかった	0 0
	小計	46 (100)	
d	ワークの量		
	1	多かった	1 (2)
	2	やや多かった	12 (26)
	3	ちょうどよかった	31 (68)
	4	やや少なかった	2 (4)
	5	少なかった	0 0
	小計	46 (100)	
e	業務内容や支援実践への適用性		
	1	そう思う	37 (80)
	2	ややそう思う	8 (17)
	3	どちらともいえない	1 (2)
	4	あまりそう思わない	0 0
	5	そう思わない	0 0
	小計	46 (100)	
f	理念・考え方の実践意向		
	1	そう思う	43 (94)
	2	ややそう思う	1 (2)
	3	どちらともいえない	2 (4)
	4	あまりそう思わない	0 0
	5	そう思わない	0 0
	小計	46 (100)	
g	職場内での共有意向		
	1	そう思う	38 (83)
	2	ややそう思う	6 (13)
	3	どちらともいえない	1 (2)
	4	あまりそう思わない	1 (2)
	5	そう思わない	0 0
	小計	46 (100)	

った。実務経験年数は平均 18.6 年であり、範囲は 3～39 年であった。

## ② 研修の評価

プログラムの有用性や研修実施上の課題、及び日本の支援現場への適用性について、研修受講者に 5 件法で回答を求めた。

研修に対する評価は（表 1）の通りであり、総じて高い評価と実践への適合性が示された。

「内容の分かりやすさ」は、分かりやすかった（22 名）、やや分かりやすかった（18 名）を合わせ、約 87% が肯定的な評価であった。「時間配分と分量」は、ちょうどよかった（23 名）が半数だった一方、やや長かった（12 名）、やや短かった（11 名）に分かれた。「ワークと事例の理解のしやすさ」は、分かりやすかった（24 名）、やや分かりやすかった（14 名）と多くが理解しやすいと回答していた他、どちらともいえない（3 名）、やや難しかった（5 名）であった。「ワークの量」はちょうどよかった（31 名）が多かったが、やや多かった（12 名）、やや少なかった（2 名）が 3 割程度であった。「業務内容や支援実践への適用性」、「理念・考え方の実践意向」及び「職場内で共有・伝達の意向」は、そう思う、ややそう思うを合わせて、約 95% 以上であった。

「受講して良かったと思う点」、「改善点」、「特に分かりにくかった言葉・用語」、「感想」について自由記述を求めた。

「受講して良かったと思う点」については、以下のような回答が示された。

- 普段は利用者本位になりがちですが、支援者の感情やストレスに寄り添う重

要性に気づけた

- 課題解決において「自分自身を変える」「コントロールできるのは自分だけ」という視点を持てた
- 心理・社会・生理学に基づく知識や、「システム 1（感情的）」「システム 2（論理的）」の概念を学んだことで、人が陥りやすい認知や反応を理屈として深く理解できた
- 具体的な動画資料等を通じて、概念を実感として理解できた
- 個人の学びに留めず、チーム全体が「システム 2」の状態で落ち着いて話し合える環境を作りたい

「改善点」については、以下のような回答が示された。

- ワークの時間が短い
- テンポが速い
- ワークの「ねらい」についての事後解説があると良い
- 日本版の副教材や解説書があると良い
- 海外の動画教材について、英語音声や字幕を追うのが大変、文化的背景が異なり想像を要する。動画を 2 回流すなどの工夫や、日本文化に合わせてローカライズされると良い
- 初学者ほど、テクニックと魂の両極にぶれやすいと考えられるため、シナジーを受講することで、「私たち（支援者）のとらえ方こそが重要であり、「懸念される行動」に対応するための技法を学ぶ必要はない」とか「発達支援は定型発達とよばれる人たちによるエゴであり ASD の文化を台無しにするものである」などのように受け取る初学者もでてきてしまうのではないか

など感じた。そのため、強度行動障害支援者養成研修や ABA、発達支援のための様々なプログラムなどとシナジーとの関係性が示されると、よりわかりやすくなるのではないか。

- ペアワークは1日目と2日目で相手を変えてみると、他の方ともワークできると感じた。

「特に分かりにくかった言葉・用語」については、回答者の多くは「特になし」や

- 神経系など雑学の部分は理解が追いつかなく頭が疲れたが、わかりにくい内容はなかった
- 初めての言葉が多かったが、事例を挙げての説明だったため、理解できた

など、プログラム内で使用された用語や概念は概ね適切に伝わっていることが伺えた。一方で、

- 心理学者の理論など理解している前提での話の部分が分かりにくかった
- シナジー
- ナラティブ
- 「システム1・システム2」などの概念について、受講者自身は深く理解したものの、現場目線では、同僚に伝える際にはもっと時間をかけて伝えなければならないと思ったので、研修をもっと聞きたいと思った

といった回答が見られた。

自由感想では、障害特性や支援手法といった技術的な学びを超え、支援者としてのあり方や基本姿勢を見直す機会となった、エンパワメントされたという好意的な評価が見られた。

- 対象者の行動だけでなく、支援者自身のマインドセット（システム1の認識

など）に焦点を当てることにより、自分の支援の原点に帰れた、これまでの支援が間違っていなかったと再認識できた

- 最後に提示された動画等を通じて、深い感動と研修意義の腑に落ちる感覚を得た
- 福祉施設の職員だけでなく、学校・教育現場や、他科の医療連携、依存症治療など、様々な分野へこの考え方を広げたい
- 個人の学びに留めず、チーム内で時間をかけて話し合い、同じ視点を共有できる仲間を増やすことが、実際の支援現場における虐待防止や離職防止において不可欠

### ③ 実務経験年数による評価傾向

実務経験年数と研修評価項目との関連を検討したところ、実務経験年数は「時間配分・分量」と正の相関を示した ( $r=.366$ )。このことから、実務経験年数が長い参加者ほど、研修の時間配分や分量について「短い」「もっと時間が必要である」と感じる傾向が示唆された。

また、実務経験年数は「ワークや事例の理解しやすさ」と負の相関を示した ( $r=-.441$ )。これは、実務経験年数が長い参加者ほど、ワークや事例を理解しやすいと評価する傾向を示していると考えられる。経験豊富な参加者は、研修内容を自身の実践経験や組織内での支援課題と結びつけて理解しやすく、その結果、個人の学びにとどまらず、部下や組織を守るためのツールとして本プログラムを捉えていた可能性がある。

一方で、実務経験年数が短い参加者にとっては、理論的背景や概念、ワークの情報量が多く感じられ、内容を理解・整理するために一定の負荷があったことが考えられる。そのため、経験年数によって研修時間や内容の受け止め方に違いがみられたといえる。

(表2) 実務経験年数と各研修評価項目との相関係数

	内容の分かりやすさ	時間配分・分量	ワークや事例の理解しやすさ	ワークの量	業務への適合性	理念・考え方の実践意向	職場内での共有意向
実務経験年数	-.144	.366*	-.441**	.007	-.131	-.085	-.054

Pearson の相関係数 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

## (2) シナジー・プログラム (実践編) の実施と評価に対する開発者からのフィードバック

協議の結果、プログラムは導入国の文化的背景に合わせて修正可能であることが確認され、日本の支援現場に即した内容調整やローカライズの必要性が示された。トレーナー育成については、日本において参加者をトレーナーとして認定することが可能であることが確認された。

メンター制度については、英国等で「Leads」と呼ばれる実践共同体の仕組みが運用されていることが紹介された。具体的には、Social learning の手法を用いたオンラインミーティングを実施し、学校教員や成人サービスのメンター等が参加してい

ることが共有された。シナジー・プログラムは英国のみならず、オーストラリア、マルタ、ギリシア、シンガポール等でも実施されており、国際的な展開が進んでいることが確認された。さらに、国際的なシナジー・コミュニティの維持・発展に向けて、Leads や World conference 等の活動が行われている。

第三者評価については、プログラムの運用に関与していない大学機関が倫理申請を経て独立した形で実施していることが確認された。具体例として、ギリシアではペロポネソス大学、英国ではバース大学が評価を担っていることが示され、日本での今後の評価体制を検討する上で参考となる情報が得られた。

## (3) 家族および支援者を対象とした質的インタビュー調査の結果

家族に共通するテーマとして、強度行動障害が顕在化または悪化した契機について、骨折、合わない教員や施設での体験、てんかんの発症等の具体的なライフイベントが共有されていた。家族自身の心身への影響としては、重篤な身体疾患の発症、睡眠障害、職業継続の困難に加え、「一緒に死んだ方が楽」「殺してやろうかと思った」と語られるほどの絶望感や、過去に自らが体罰や強制をしてしまったことへの後悔が複数の家族から示された。また社会的ネットワークは配偶者を中心に極めて限定的であり、親族や友人に頼ることが困難な状況が多く認められた。

支援者に共通するテーマとして、行動を「特性」「環境」「見通しの崩れ」等の機能的枠組みで理解し、視覚支援、構造化、記録に基づく仮説検証等の専門的手法を用い

る点が共通していた。自己ケアやチームでの情報共有の重要性は認識されていたが、組織体制によって実装の徹底度に差が認められた。

両者の共通点として、トラウマの一般的概念（フラッシュバック、過覚醒等）はある程度理解されている一方、TICの4つのRやACEsの概念的理解は浅く、本人の状態に体系的に適用する視点は限定的であった。再トラウマ化を避ける配慮（強制しない、否定的言葉を避ける等）は、家族は経験的に、支援者は研修的に、それぞれ実践していた。

両者の相違点として、家族は本人の長年の生活史を踏まえた個別的・関係的な対応を行うのに対し、支援者は構造化された専門的手法を用いる傾向が認められた。特に、家族の中に蓄積された本人固有の「トリガーの歴史」（特定の人物・場所・出来事の記憶）が、支援者には十分に共有されていない構造的課題が示された。

#### D. 考察

本研修の評価から、シナジー・プログラム（実践編）は、日本の強度行動障害支援の現場においても一定の有用性と適用可能性を有することが示唆された。特に、内容の分かりやすさ、支援実践への適用性、今後の実践意向、職場内での共有意向について高い肯定的評価が得られたことから、本プログラムが単なる知識提供にとどまらず、受講者の支援観や実践姿勢に影響を与える研修であったと考えられる。

自由記述からは、支援者が利用者の行動のみならず、自身の感情、ストレス、認知のあり方に目を向ける契機となったことが

うかがえた。これは、強度行動障害への対応を、技法や管理の問題としてのみ捉えるのではなく、支援者自身のマインドセットやチーム内の関係性を含めて再考する視点を提供した点で重要である。また、「自分がコントロールできるのは自分自身である」という視点や、システム1・システム2の概念は、支援場面における感情的反応を理解し、より落ち着いた対応を促す枠組みとして受け止められていた。

一方で、研修時間や進行のテンポ、ワークのねらいに関する補足説明の不足、海外教材に含まれる文化的背景や字幕理解の難しさなど、研修実施上の課題も明らかとなった。また、実務経験年数によって研修内容の受け止め方に違いがみられたことに加え、本プログラムを日本の多様な支援現場にどのように定着させていくかという、デリバリー上の課題も示された。

AT-Autismとの協議により、日本の支援現場に応じたローカライズが可能であることも確認され、今後は、日本の支援文化や現場状況に即した教材を整備することで、より理解しやすい研修となると考えられる。

今後は、トレーナー育成、メンター制度、第三者評価を組み合わせ、継続的かつ質を担保した展開体制を構築することが重要である。

質的インタビュー調査からは、家族と支援者は同一の対象者について異なる視点と知識を有しており、特にトラウマ的経験の歴史と専門的概念の双方向的共有に課題があることが示唆された。家族は本人の長年の生活史に裏打ちされた個別的な理解と「トリガーの歴史」を保持している一方、支援者は構造化された専門的手法と組織的

な支援体制を有しており、両者が相補的な知見を持つ存在であることが明らかとなった。シナジー・プログラムが重視する支援者自身のマインドセットの省察に加え、家族の経験知を支援計画に取り込む仕組みの整備、および家族・支援者の双方に対するトラウマインフォームドケアの基礎的研修の提供が、今後の重要な課題と考えられる。

#### E. 結論

本研究では、強度行動障害のある人々への支援において、支援者のマインドセットや行動に焦点を当てた「シナジー・プログラム」の日本導入を目的として、シナジー・プログラム（実践編）の日本語版を作成し、研修の実施および評価を行った。あわせて、同プログラムの実施内容および評価結果について開発者からフィードバックを得るとともに、今後の国内普及と実装に向けた協議を行った。

本研究により、シナジー・プログラム（実践編）は、日本の強度行動障害支援の現場においても有用性と適用可能性を有することが示唆された。受講者は、支援技法のみならず、支援者自身のマインドセットやチームのあり方を再考する機会を得ていた。一方で、教材のローカライズや補足的説明の必要性も明らかとなった。今後は、トレーナー育成、メンター制度、第三者評価を含む実装体制を整備し、継続的な普及を図ることが重要である。

#### F. 健康危険情報

特記すべき事項なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

内山 登紀夫, 鈴木 さとみ. 今こそ知ろう, 強度行動障害 概論 強度行動障害と自閉症. 児童青年精神医学とその近接領域 66(1) 20-27 2025 年 2 月

##### 2. 学会発表 なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

##### 1. 特許取得 なし

##### 2. 実用新案登録 なし

##### 3. その他 なし

#### I. 引用・参考文献

Richard Mills (2024) Chapter 11, Working with schools, A synergy approach, Pavlopoulou, Georgia; Crane, Laura; Hurn, Russell; Milton, Damian. Improving Mental Health Therapies for Autistic Children and Young People: Promoting Self-agency, Curiosity and Collaboration (Anna Freud) (English Edition) (p.133). Taylor & Francis. DOI: 10.4324/9781003352327-16